

一開かれた場を考える一

前端：なかなかテーマが決まらず、紆余曲折してきた「PARK展」会期まで、あと少し。「PARK」という言葉をテーマにすることが決まったのは、語源であるゲルマン語では「囲われた場所」という意味を持っていることが分かったときだね。私たちがイメージしていた「PARK」は「開かれた場所」なのに、語源は「閉じている」という逆の意味をもっていた。では「PARK」とは一体どのような場所になるんやろうって考えることになった。松本：そうだね。話し合いを進めていくうちに、私たちに「公園」を与えられてはいるけれど、それは国に管理され、制限が多いものだと思つた。そうではなく、いわゆる「開かれた場所」ってあるのかな？という疑問を持つようになった。そして「開かれた場」とは一体どんな所なんだろう、と考え出したんだよね。菊池：私は、「開かれた場所」というのは、さまざまな意見があつていい場所だと思っている。今の社会はすごく意見や考え、価値観が偏つていると思つていて…。例えば、「かわいい」だったり、「これがいいよね」というものが、みんな同じような気がする。「開かれた場」の

役割は、同じ場所を共有はしているけど、まったく意見の違う人が存在しているということだと思ふ。前端：今回の展覧会に置き換えてみると、大学で同じ授業を受けているけれど、価値観も性格もバラバラなメンバーで、ひとつの展覧会をつくらうとしている。だから一見まとまりがなく、ある意味方向性がないかもしれない。けれど違う見方をすれば、個人としての方向性や多様な考え方をそれぞれが持ちながら、同時に場を共有する試みになるんじゃないかなと。菊池：最近京都のデモに参加して改めて感じたけれど、私はデモの在り方って、いろんな人が集まって「場所は共有するけど、意見がバラバラである」ことが自然なことだし、それが社会に対して正常なことじゃないかと思ふんだ。松本：今回は「閉じられた場所」を感じさせる作品をつくらっている作家もいるよね。辻梨絵子の作品は自身の幼い頃の記憶にある、マンションのコンクリートに囲まれた中庭が発想の源。彼女は、囲われていることで安心感を得られると話していて、なんでもかんでも開かれてい

ればいいわけでもない。けれど、プライベートな空間は個人で確保しながらも、複数のプライベートが出会う場所が少ないんじゃないかと思う。前端：つまり、実際に身体が集まれる空間と個々の意見を認める共通意識が保たれた場が求められているということかな。だとしたら、この展覧会でそんな場ができたらいいいよね。それが私たちのテーマとなる「PARK」なのかも。ここで話されたことが掲載される予定のフライヤー兼タブロイドの発行物も、共通のテーマをもとに紙の上でそれぞれの意見をみんなに書いてもらっている。このメディアが、読む人に「PARK」を考えてもらえる入り口になればいいな。

Graphic: 万藤志帆



遊具

昨日、遊具が危険だという理由で使用を禁止されたり、撤去されたりしている。危険と思えるものを、取り除くという解決方法で本当にいいのでしょうか。遊具は必ずしも必要なものではありませんが、物に触れ、身体を動かし、時に少し危ない経験もする。そうしたことが子どもたちの心身の成長を促すのではないのでしょうか。とはいえ鉄製の遊具は怖いので、もう少し柔らかい遊具があるといいですね。

文・写真：岡崎麻衣



東九条

東九条は、京都の中で最も多くの在日韓国人が暮らしている場所です。私は写真撮影のために東九条を訪れ、色々なことを学びました。彼らとの会話から、在日韓国・朝鮮人の方々受けた差別問題を知り、彼らが営む韓国料理屋では韓国料理の美味しさを知りました。私にとって東九条は生活に深い部分にある関心を得られる、そんな大切な場所です。



文・写真：村治瑞穂

たび重なるディスカッションを経て、決定した今回のテーマ「PARK」。誰もが知っている言葉にも関わらず、なかなか捉えどころのない「PARK」から、本展覧会の在り方をメンバー3人で考えてみました。

私信

父へ
誕生日おめでとう。いつもしようもないスタンプをFacebookで送り続けてくれてありがとう。癒されてないこともないです。

母へ
展示見に来てくれてありがとう。そして一緒に京都観光ができることを嬉しく思います。初・嵐山に胸が踊ります。

おじいちゃん

私のおじいちゃんは家から出ない。テレビの音をBGMに、ソファーにもたれながらお菓子をつまむ。1日の大半をリビングにあるソファーで過ごしている。PARKとは心地よい自然と足が向いてしまう場所なのではないかと私は思っている。おじいちゃんにとっての「PARK」はリビングのソファーなのではないだろうか。

文・写真：米田有希



マイルール



ただ歩くだけっていうのが、味気なさすぎてなかなか続けることができなかった。だから足が止まらないための方法を作っていた。マンホールのための歩き方とか。歩くためのマイルール。

文：柳瀬安里



僕は最近スケボーを买おうとしている、3日ほど前に『LORDS OF DOGTOWN』という映画を観たのがきっかけだ。内容は70年代カリフォルニアでのスケーターの話で、たったの3年で世界のカルチャーを変えエクストリームスポーツの先駆者になった少年達の実話だ。すごいカッコよかったのだ。スケボーはもともとカリフォルニアのサーファー達が、波のない日に陸でもサーフィンが出来るようはじめたのが発祥と言われている。しかし道路や公園では制限も多く、スリルを求めて他人の家に忍び込んで空のプールを波に見立てて滑り出したのが今のスケボーパークのようなものらしい。要は、波がないから道路で滑って、道路じゃ怒られるから他人の家に忍び込み、しまいには自分たちで作っちゃえ、でできたのである笑。もうむちゃくちゃである。でもそんな状況から産まれたものがスゲーカッコよくて当時は見向きもされなかったフリースタイルのスケボーが今ではひとつのカルチャーになっている。それら、もうスケボーを買うしかない、しかし道路で滑るにも日本じゃ下手したら捕まるし、公園なんか堂々と看板に禁止と書いてある。というか近頃の公園は禁止事項が多すぎる。ボール禁止、ラケットやバットも禁止、なんなら飛ぶものは全部禁止、車輪のつく乗り物の乗り入れ禁止、ひどい所は大声も禁止。ブランコや遊具は怪我をするからと撤去。じゃあ今時の若者達はなにをしているのか。そういえば「今時の若者は〜」という言葉は、嘘か真か古代エジプトの壁画にも書かれていたようだ、いつの時代も年の離れた人間がする事を、大人は理解できないものだ。話は戻るが今時の若者達は公園でDSをしているのだ。雪の降る真冬だろうがセミがガンガン鳴く夏でもだ。おそらく家でゲームをしてたらオカンに外で遊んでこいとヤイヤイ

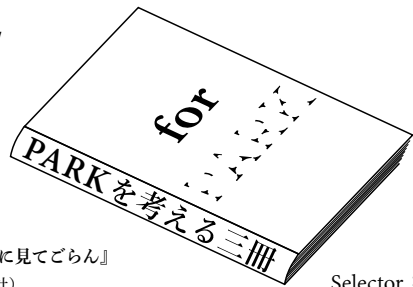
言われ仕方なく公園にすれば、公園はこの有様なのでもう黙ってDSをするしかないのである。ここまでの流れはほとんどカリフォルニアのスケーターと同じなのになぜこうなったのか…。いや、もしかしたら彼らはとてつもないエクストリームスポーツをしているのではないのか？もしかしたら僕の理解を超えたカルチャーがまた産まれようとしているのか？僕の購買意欲はとてつもなくニンテンドーDSに傾きつつある。

Focus

文：中村琴葉

最近、日常の中でさまざまな交流が少なくなったのではないかと私は感じている。これは相手に「目をむける」ということを私たちがしなくなったからではないだろうか。生まれたとき私たちは当然、言語を持っていない。だから赤ん坊の頃はママの温度やパパの手の固さに触れ、それを感じることで、やっと自分のママやパパを認識していたように思う。そうして真夏の太陽に照らされながら、砂場でお団子を作り土の感触を覚えたり、土を掘ることで徐々に土が冷たくなっていくことを体いっぱい感じていた。言葉もままならないからこそ、身体を使い、感じてみることで、子どもりの相手を知ろうとしているところを親が行かせまいとするのを見たことがある。この触れてみようとする心を摘んでしまうことが、私たちの交流の妨げになっているのではないかと。今や飛行機でどこへでもいける時代になり、技術の発達によって遠かった国も身近に感じるようになった。しかし、技術ばかりが進みすぎて、私たちは目の前にいる人から遠ざかっているのかもしれない。以前、私がスイスのジュネーブに交換留学をしていたとき、お互いが相手の国籍のイメージにとられてしまい、個としての関わりを持つのに非常に多くの時間を費やした。そこで大切だったことは、相手に「目をむける」という心の動きだった。今までこうした心がけによって、私は別の何かとつながり続けてきたのだと思う。この他への関心を持つとき、相手を受け入れ、尊重し合った私たちの交流が始まるのだろうか。

文：辻梨絵子



『世界を、こんな風に見てごらん』 Selector：留岡愛子
日高敏隆 / 著 (集英社)



公園 / パークは、変幻自在の不思議なフィールドです。私達の知識や考え方、そして想像力によって、その使い方や存在価値までも変化します。小さなアーティストとして、多角的な見方や世界観を提示することを使命と考える私に、そのワクワクを教えてくれた動物行動学者・日高敏隆さんのエッセイ&講義集録本。あらゆる「知っているもの」の見方を新しくしてくれる一冊です。

『ガブリエル・オロスコ 内なる複数のサイクル』 Selector：南竜司
編集：西川美穂子 (東京都現代美術館)
絵崎今日子 (フィルムアート社)



ガブリエル・オロスコの作品は常に遊戯性豊かでパフォーマンス、自由な発想で遊びをクリエーションし、子どものように軽やかだ。また普段は日常の中に紛れていて気にも留めない物が、彼の編集作業を通して、滑稽で皮肉めいた遊具やオブジェ、絵画作品へと変貌する。彼の作品の軽やかさや作品に込められた笑いの要素は、僕に社会の中で他者と共にクリエーションしていくことの喜びと勇気を与えてくれる。そんな作品と出会える一冊。

『うる星やつら』 Selector：虎岩慧
高橋留美子 / 著 (小学館)



高橋留美子のコミック『うる星やつら』は、民族的なアイテムとSFファンタジーが混淆した、独特の作品世界で展開される。鬼や雪女や弁財天をモチーフとした宇宙人=異人たちが、セクシャルな衣装を纏っては次々と現れて事件を起こしていくこのドタバタ・コメディは、「PARK」を読み解く1つの方向を示してくれるはずだ。



Let's make good day in 中京区!



IALOGUE：川崎梨子 × 高山岬 × 脇谷緩
本企画では展覧会とワークショップ(WS)を二本柱として、会期中には子どもを対象のWSを開催します。運営担当の高山と、企画担当の2人がねらいについて語りました。



- 今回のWSについて、企画が生まれた経緯、また2人がどんなことを考えているのか気になってます。
- 最初中京区役所に行ったよね。
- 区役所には子育て支援の資料がたくさんあって、子育て支援力を入れているんだとわかった。そのときはあまり気に留めてなかったけど、「中京区基本計画」を読んでいると遊ぶための公園が少ないことや子どもの数が増えているって事が分かって、そこで区役所で見たブースを思い出したことがこのWSをやる一番初めのきっかけかな。
- そう、子どもはどこで遊んでいるの？公園は本当に少ないの？って考えてさらに調べていくと出生率は年々上昇して、人口も増えてるらしいから一人あたりの公園面積が少ないってだけで案外公園はあるんだって。実際に中京区遊び場マップっていうのがあって、公園をまわってみただけに近い距離に意外と公園がある。
- ここまで聞いて、今回二人が子どもを対象にした理由が中京区が力を入れている問題に関係してるんだなってことがわかった！
- 最初は展覧会だけで、WSをしようと思っていなかったんだ。でも中京区で実際にリサーチをしていると、さっき話したようなことがわかってきて、中京区の子どもたちとWSをしようってことになったんだよね。
- うん、中京区に住んでいる子どもたちに会ってみたい！でも実際私たちに出来ることはなんだろうって考えた。
- 大学で写真専攻してるからもちろん写真を撮ること、写真を撮るためのものをよく見て、できあがった写真をもう一度よく見る。そして見たもの考えたことを文章にして、編集したり声にしたり、ということが私たちが共通して出来ることかなあって。
- そうやって同じもので繰り返し考えることは小学校の園工ではなかなか出来ないもんね。
- 確かにキットを作って終わりだった記憶しかないなあ。
- そういえば知り合いのお母さんが、学校で作った工作は大体最終的に捨てるしかないから、作品以外に残るものがあつたらいいなって言った。今回考えたWSみたいに写真に撮って言葉にして本を作ったりすると後から見返せるし、子どもの言葉も残るし、WSは子どもたち向けだけではなくお母さんたちのためにもなればなああって思っている。
- 作ったものからその最中の記憶が思い起こせるものになりそう！
- 私たちでもそのとき何を考えて作ったかなんて割とすぐに忘れちゃうもんね。その場で子ども達に発表もしてもらって、正解なんてないから全然喋れなくてもいいと思う。でもきつと自分の言葉で話すことの難しさとか、真剣に考えた分得られるものも多い。
- 作ったものに対して生き生き話をしてくれるとお母さんたちも嬉しいだろうね。そうやって一人一人じっくり話そうとしたり考える場になるようにしたいっていうのが人数制ってとこにも繋がるわけだ。いっぱいの人数でおいわいた方が楽しそうって思っていたけれど、その意図なら確かに人数ではできないね。
- ざっくりですが、私たちはこんな経緯でWSをやろうってなりました。
- このWSを通してもっと中京区やそこに住む人達のことを知ることできそうって、なにより楽しそう！引き続きWS担当よろしくお願ひします！
- ・ ● ：がんばります！

Cinema Review

のえるの 時間泥棒

selector：菊池のえる

「PARK」とはどういった場所なんだろう。それを考える時なぜか、映画論・現代思想を専門とする、廣瀬純先生の授業で観た小津安二郎の『お早よう』を思い出した。

『お早よう』の本編に、面白いシーンがある。それは、大人たちが「子どものくせに余計なことを言うな」と怒鳴ると、子どもたちは「大人だってコンチワ、オハヨウ、イオテンキデスネ、余計なこと言ってるじゃないか」と反撃に出るシーンだ。「おはよう」に大きな意味はない。大人たちの日常に頻りにでてくる、月並みな会話に対する子どもたちの疑問だ。

「おはよう」とは一体なんだろう。

一方、スタンリーキューブリック『2001年宇宙の旅』での、宇宙ステーションの親子の電話は、つまらなさそうだ。猿人期の人間は「ウホウホ」と喋っていたが、次に宇宙ステーションでのシーンで話される仕事の会話はたわいもなく、親子のテレビ電話のシーンの会話は猿人期の「ウホウホ」と言っている頃と内容は大して変わっていないのかもしれない。むしろ中身がなく、本当にくだらない会話になってしまったように思う。その話の内容は事務的に発せられる「おはよう」とかわらないのかもしれないが、しかし「おはよう」という言葉は意味もない言葉なのだろうか？

さて、ここでジャン＝リュック・ゴダール『勝手にしやがれ』

にしががれ、フランソワ・トリュフォー『大人はわかってくれない』を2本続けて見てみよう。映画を貫く1つの筋書きのようなものではなく、従来映画にあるストーリーとは、私たちの幻だったのではないかと思わせる。私たちは、画面に出てくる出来事や言葉を頼りに映画を読み進めていくのだが、そのとき実はストーリーを予想しながら観ていたことに気付く。この2つの映画は、その予想をまったく立てさせないような、天気のように出来事が表情を変えていくのだ。まるで人の心や行動が、状況や気分に変化するように。

例えば、そうした個々で生まれる出来事に「おはよう」と発することで、その言葉が接点となり他のストーリーがつながってくるのではないか。「おはよう」事体に大きな目的はない。しかし、効率を重要視するあまり、会話に目的を持たせようとしたら、無駄を省くことは、人の関わりの時間を減らしているのとかかわらない。「おはよう」いう言葉の役割は「おはよう」と言葉を発する短い時間を他と共有することであり、そのとき、共有している場所こそ私は「PARK」になりえる場所なのだと思う。



『お早よう』(1959年)
日本・94分
監督：小津安二郎
脚本：野田高梧、小津安二郎



『2001年宇宙の旅』(1968年)
イギリス・アメリカ合衆国・141分
監督：スタンリー・キューブリック
脚本：アーサー・C・クラーク



『大人は判ってくれない』(1960年)
フランス・90分
監督：フランソワ・トリュフォー
脚本：フランソワ・トリュフォー
マルセル・ムーシー



『勝手にしやがれ』(1960年)
フランス・90分
監督・脚本：ジャン＝リュック・ゴダール
原案：フランソワ・トリュフォー



そう、それが俺たちのパーク...

作詞：榎下まき子

吹き抜ける生命の突風
見逃すんじゃないやねえあれが人間のシェイプ
みんなで遊んだパーク
心拍数あがる 鳴らすシンバル
開けよあの鼓動 古代から続く振動
受ける俺たちTake off
逃げろ坂を越え物申す古代人
物無様なエージェンシー
無我の境地の 化石の昨日
見える儼やかなシンパシー

lalala... ディー・イン・マイ・マインド...
lalala... エスケープ・フォー・ザ・タンジェント...

Information

ワークショップ

オノマトペ大辞典〜チェキで撮って、オリジナル大辞典を作ろう!〜 2015.7.26 [Sun.12:30-16:00] (予定)

*雨天決行*事前予約制

持ち物：筆記用具、水分補給できるもの

対象年齢：中京区に住む小学1年生〜6年生

ワークショップの問い合わせ/予約先：kuad.park@gmail.com

【オノマトペ】とは？〜擬音語や擬態語のこと。

街を歩くとスタスタ。雨が降ったらしとしと。

笑ったらにこにこ、泣いたらしくしく。

1日の中にはそんな・オノマトペ・が溢れています。

中京区にある色んな・オノマトペ・を探しにいこう!

*詳細は募集チラシでご確認ください。

パフォーマンス

7.23 [Tue.] 19:00-19:30

菊池のえる + 松本杏菜 + 柳瀬安里

「線を引く」ことをテーマにしたパフォーマンス。私たちのなかに漠然とあるイメージを、自らの身体を使い線を引き、問い直すことで、イメージからの自発的な逃亡を試みる。また、「線を引く」という行為自体の可能性について、いかにしてその行為の内に新たな可能性を見つけ出し、実践していくのか。そのための線を引き起こす方法を探る。

closing party

7.26 [Sun.] 18:00-20:30

* 19:00-19:30 パフォーマンス上演

(菊池のえる / 松本杏菜 / 柳瀬安里)

作家が在廊し、直接お話しができる場として、ささやかなパーティーを開きます。会期中二回目のパフォーマンス公演も同時開催致します。どうぞお気軽に「遊び」にお越し下さい。*ソフトドリンク・アルコールもご用意しております。

本企画を考えるにあたって、中京区基本計画から、以下のデータを参考にしました!

京都市・中京区の人口は、昭和30年の16万7千人をピークに一貫して減少を続け、平成7年には9万1千人まで落ち込みました。しかしその後、マンション増加などを契機として人口増に転じ、平成22年9月の推計人口では10万5千人まで回復しました。そして、人口増加に伴い出生数も向上。京都市が減少傾向にあるなか、近年10年間で中京区の出生数は2割以上も増えています。しかし一方で、区民一人当たりの公園面積が中京区は0.7㎡と全市平均の4.7㎡を大幅に下回ります。それは、古くから高密な市街地が形成されたため、まとまった規模の公園や空地が少ないことが背景にあります。更に、通勤・通学による流入のため、昼間は夜間の1.6倍程度まで人口が膨らみます。通勤・通学以外にも、観光、買物、ビジネスなどの目的で多くの人が区内を訪れているため、実際の昼間人口は更に多いと考えられます。

「PARK」では、これらの状況についてリサーチし、中京区の抱える問題を踏まえ、展覧会の開催に至りました。

出典：京都市中京区 ホームページ 中京区基本計画 (第2期) 資料編より

www.city.kyoto.lg.jp/nakagyo/page/0000098264.html

展覧会についてのお問い合わせ

京都造形芸術大学 美術工芸学科 現代美術・写真コース

(担当：大河原)

〒606-8271 京都府京都市 左京区北白川生山 2-116

Tel. 075-791-9122

mail : kuad.park@gmail.com

twitter : @kuad_park2015

Facebook : http://www.facebook.com/events/102362973438139/

企画：京都造形芸術大学 現代美術・写真コース 4 回生

会場：ozasahayashi_project、KYOTO ART HOSTEL kumagusuku

協賛：A.S.K atelier share kyoto、OZASA KYOTO

後援：ozasahayashi_project、KYOTO ART HOSTEL kumagusuku



ozasahayashi_project
KYOTO ART HOSTEL kumagusuku 京都アートホテルクマガスク
住所：〒604-8805 京都市中京区壬生馬場町 37-3
URL : http://kumagusuku.info



アクセス

電車：阪急京都本線「大宮駅」より徒歩5分、JR嵯峨野線、地下鉄「二条駅」より徒歩8分
バス：京都市営バス「みぶ操車場前バス停」より徒歩1分
*専用駐車場・駐輪場はございませんので、お近くのパーキングをお使いください。